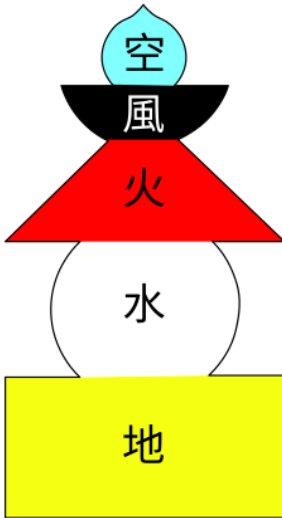
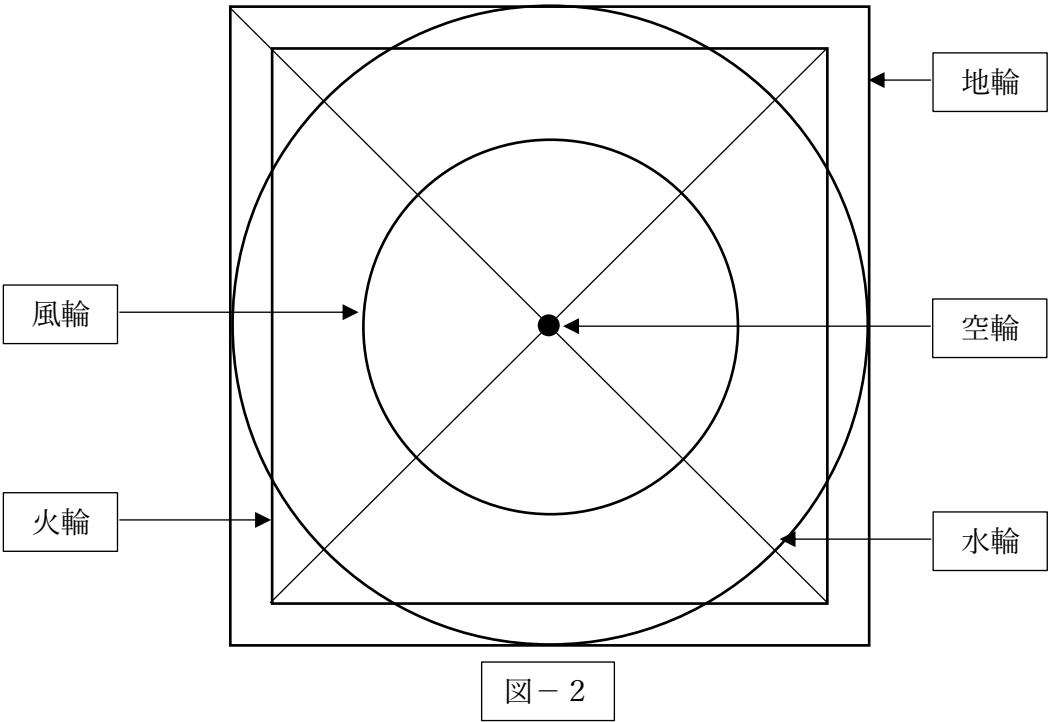


五輪塔から学ぶ応用編である。

(奈良市西大寺奥の院)	一般的構成	五大	構成の根拠	(参考/五行)	
		宝珠	天空 (虚空)	大日経疏卷十四 秘密曼荼羅品十一に 「地、輪西方 水、輪円 火、輪三角 風、輪 半月 最上虚空、作一点」とあるとい う。	日
		半円	風		木
		三角	火		火
		円	水		土
図 - 1 a	図 - 1 b	四角	地 (地球)	月	金
					水
				図 - 1 c	

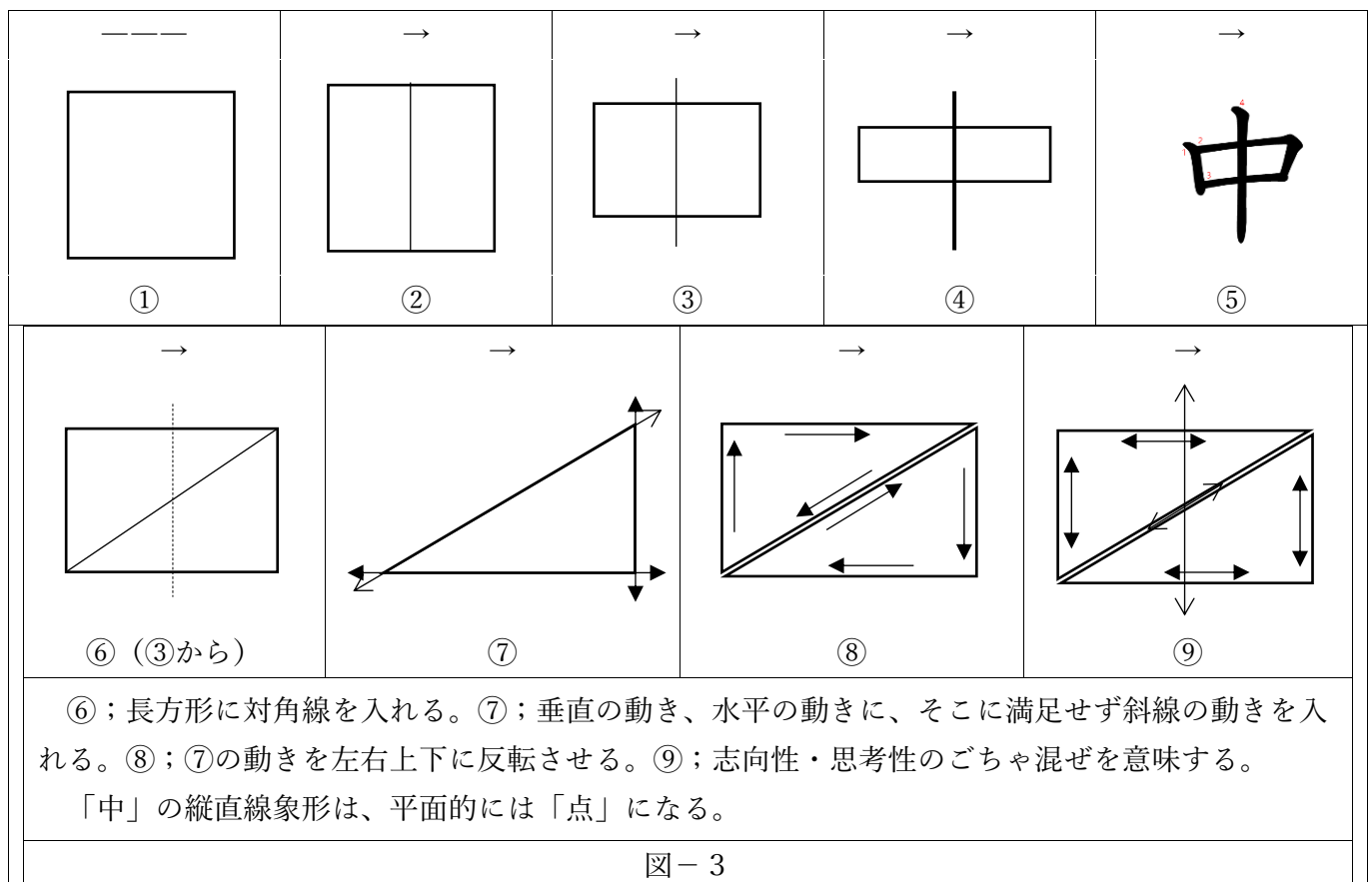
夔田嘉一郎著「宝篋印塔の起源 続五輪塔の起源」(綜芸舎) P120 に五輪塔を平面的にデフォルメすると図 - 2 のように描けるとある。三角の火輪がなぜ正方形なのかということは書かれてはいないが、三角を二つ合わせると四角形になるのだ、逆に四角形は二つの三角形に分解できるということから来ているのだろう。なぜ、これは円の方形化(円と等しい面積の方形を作れるかという数学上の歴史的問 題)が発想の原点にあったようである。なお、幾何学的な形を定義出来るのは最小の3 点を以って形成される三角形である。



そこでこの応用拡大版、私の推論（仮説）を記述する。まずは大前提がある、あらゆる事象の「もの・こと」に対する向き合い方において、その考え方、評価の仕方、生き方において、一つの、一面の、一つの切り口からだけの一方通行の捉え方は取らないように意識している、そのような捉われ方は、自分を四角四面に押し込んで限定した生き方——ネットで囲んだ檻の中に入って一人相撲している滑稽な状態になってしまうからである、それは、一生一度の人生にとってはとてももったいないことになるからである。

さて、老子等による陰陽の原初においては「一は二を生じ、二は三を生じ、三は万物を生ずる。（よって、被生成万物の最初が四となる。）」として数字の自然数に重ねている。一方、易経は、陰陽の発展段階に生まれ「易に太極あり、これ兩儀を生ず。兩儀は四象を生じ、四象は八^{け(か)}卦を生ずる。」と数字の累乗で生み出している。すなわち、陰陽二元の自然数適用の思想をより複雑・高度に止揚を図ったものである。老子の「二」は易の「兩儀」に相当することからは「四象」が被生成万物の最初の数値となる。混沌の何もかもが統合されたものを「一」とするならば、そこが生成した最初の形のあるものは「四」ということになる、重要な基点の「一と四」を合わせた「五」に対して、宇宙成立の要素で置き換えた——組み立て直した時の五大要素が「地水火風空」となったということだろう。

ここで浮かんだのは「中」のこと、娑婆界の安っぽい妥協・打算のことではない。^{N o n}とても厳肅な真理の一点を指す究極の平衡点「中」である、中心の中、中間の中である。世の中の識者はみな「要はバランスである。」と豪語する、ならば、図-3のと通りの象形的構造からは、偏った、固執した、拘泥した思想信条をご破算すべきである。



そして、「四」の先は、生成を膨張させていくと無限性の円で表現するに至る。近江商人の「三方よし」——売り手・買い手・社会の三者が満足する循環的商売——が有名であるが、私の三方は次のとおりである。

幾何学上、点と、または、その二つの点を結んだ線は、形とは言わない、位置取りをしたということだけである。3点を決めるとやっと形を定義が出来て「三角形」となる。世の中ではよく縦軸と横軸という語彙を以って組織改革や活性化の論を展開するが、私は、それにもう一つの方向性「斜め、斜軸」の付加が大事だと思っている。よって、ここでの三角形は思考性・志向性の代弁者の象徴とする。次に四角形（＝方形）はその三角形を反転組み合わせたもので発展性と共に、それでも閉じた空間であるからには「自利」の象徴とする。次に円は、四角形を形作る点を無限に増やした先に成立する形であることから「利他」の象徴とする。

形	仮託した意味合い	
三角形	思考の基本形として柔軟性を陶冶する世界	三者統合された一点の世界 (虚空調和)
四角形(方形)	思考・志向の発展形で事上磨鍊した自利の世界	
円	自利を基点に発展的解消を以って利他の世界	
円 「三方縁」		

特に、三角形には次の意味合いを与えている。

こうか ①広化———長期的思考 左右を右往左往する	右の三角形において左回転である	
じんか ②深化———根本的思考 上下を振幅往復する		
しんか ③進化———多面的思考 前後に前進後退する		

図(表)－2

私の言う「三方縁」は、すなわち、自分と仲間（家族）と社会の「三方よし」に結ぶ意識である。

結局、五輪・五大は、「三方縁」に収れんした、収れんせしめたということである。これが私の考え方的一面である。

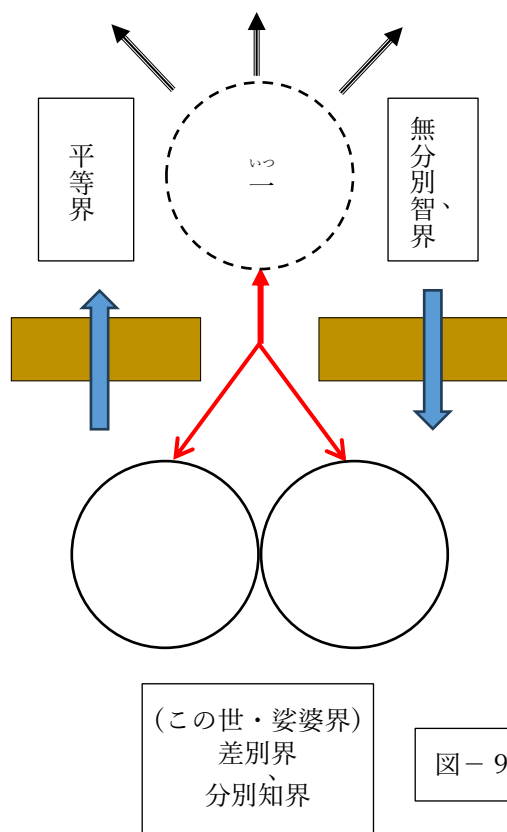
ここまで来て、近年、社会や企業において話題に上る DEI

Diversity (ダイバーシティ: 多様性)
 Equity (エクイティ: 公平性)
 Inclusion (インクルージョン: 包括性)

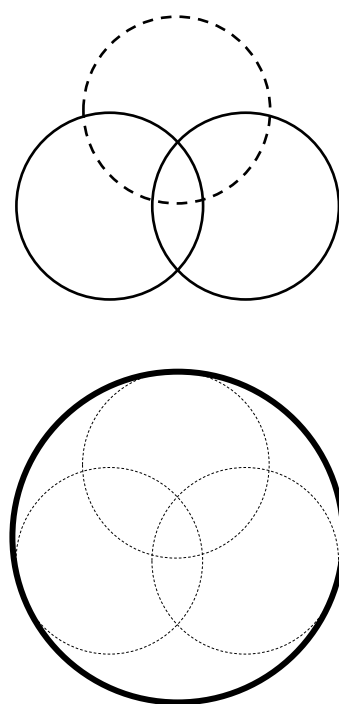
を取り上げる。ここでは一つ一つの解説ではなく私の直観の解釈である、「不二(一如)の法門」の観点に立てば、図(表)－8、および図－9のとおり概念となる。

DEI 観			陰陽二元観
Diversity (ダイバーシティ)	多様性	個体相互の対比性の視座、違いを認め合う個性尊重の視座	二元 (差別相) しゃべつ
Equity (エクイティ)	公平性	一人ひとりの事情配慮を以って優劣的差別を排除する視座、機会均等の視座	ごういつ 合一 (平等相)
Inclusion (インクルージョン)	包括性	個別能力の最大限発揮にこそ、組織全体の活力・躍動性が生まれるという視座	統合体

図(表)－8



図－9 a



図－9 b

私が常日頃から声高に言う対等互啓（恵）とは、DEI の価値観と「不二(一如)の法門」の視座を併せ持った統合的理念を指している。逆説的に平たく言うと“やったことない”、“無理だ”、“できねー”という醜態三美言“を吐く我執拡散型姿勢、そして”あれだめだ、これだめだ”という自己隔離型姿勢は破滅的であり、百害あって一利なしであるとする理念である。

(end)